

「本朝食鑑」収録の食養生記事に関する分析調査(第2報)

日本女大 石川松太郎 筑波大坂戸高の石川尚子

和洋女大 松田久子 高野俊 女子栄養大 島崎とみ子

「その1」 食生活史上よりみた本書の特徴と意義(魚介類について)

目的: 私たちは昭和57年度の家政学会総会において、近世養生書の中でも代表と目される人見必大著、元禄10年(1697)刊の『本朝食鑑』を取りあげ、収録する「食養生記事に関する分析調査」の研究発表(第1報)を行った。それはおもに、植物性食品を中心としたものであり、この第2報では、魚介食品にかかわる記事を抽出し、内容を分析して、本書の持つ食生活史上の特徴と意義とを、より明確にとらえようとする。

方法: わが国近世は、養生書・料理書などが数多く出版され、食生活に対する関心の深さを示している。その中でも『本朝食鑑』は、中国渡来の『本草綱目』の流れに位置しながら、単なる知識の羅列ではなく、作者自身が叙述しているように、庶民の日常食を中心に現実をみつめた記述がなされている。当時の食生活はもとより、現在の食生活を考える上でも重要な資料といえよう。とくに魚介食品については数多く取り上げられている上に、ひとつひとつについて詳しい解説が施されている。その内容は、当該食品の叙名、集解、気味、主治、發明、附方等に及んでいて、食生活史上、注目すべき記事が豊富である。本研究では、ひとつひとつの記事について、細かい分析を行うのと同時に、総体としての特徴を把握することにつとめた。

結果: 現在の食生活の中に脈々と受け継がれている食品、あるいは、実態がすでに消滅している食品など、いくつかの興味ある分析結果が得られたので発表する。